

企 画 書

株式会社エフ・アンド・エフ・ジャパン

◆クマとの共存を図る

近年、クマが頻繁に人里に現れ、多くの人身被害が発生していることが問題視されています。しかし、その原因を分析したり人間との共存を模索したりすることもなく、ただ大量に駆除する方法しか検討されていません。このまま、短絡的に母熊も子熊も駆除され続ければ、徹底的な駆除や生息環境の変化により絶滅してしまったニホンオオカミと同じ運命をたどるのではないかと危惧しています。

クマはご存知のとおり森林における頂点捕食者であり、クマが存在することで多種多様な生物が棲み、豊かな水源の森を守っています。そのクマが絶滅すれば、生態系のバランスが崩れて森林の劣化が進みます。動物が棲めない人工林では、すでに湧き水の減少が起り、山崩れや土石流が多発し、人の命も脅かしています。クマを絶滅から救うことは、森の生態系を守るだけではなく、人の命を守ることでもあります。(※一般財団法人 日本熊森協会 HP 参照)

そこで我々は、人も熊も傷つくことなく、棲み分けができることを目指して、使役犬の繁殖・育成で培った知見を活かしてベアドッグとその犬を扱うハンドラーの育成に尽力を注ぐことといたしました。ベアドッグは、クマの匂いや気配を察知し、大きな声で吠えて人里に近づくクマを森の奥へ追い払う訓練を受けた犬です。人はもちろん、クマも傷つけずに人とクマの共存を目指すための「クマ対策犬」です。長野県軽井沢町では、ベアドッグの導入活動後、人身被害がここ数年間にわたり皆無であるという実績があります。

(※「ピッキオ」の活動については先日「ガイアの夜明け」でテレビにて紹介されました。)



◆選定したベアドック

ベアドッグとして最も相応しいのが、フィンランド生まれの「カレリアン・ベア・ドッグ」という犬種です。体重 18～29kg の中型犬で、白と黒のツートンカラーが特徴的。

ロシアとフィンランドの国境地帯を原産とする犬で、古くからヒグマ猟の場で活躍してきました。顔にはアライグマのような黒いマスク模様があって、とってもキュートな見た目をしています。この犬は見た目とは異なり、大変優秀です。他の犬種なら 5 頭必要な仕事を、カレリアン・ベア・ドッグなら 1 頭でこなせる力を持っています。

ベアドッグは、主に次の仕事をこなします

1. 早期警戒システム

人間の何倍も優れた嗅覚で、遠くにいるクマをいち早く発見
ハンドラー（犬を扱う専門家）に危険を知らせる

2. クマの追跡調査

クマが去った後でも、残された匂いから移動ルートを特定

「クマがどこへ行ったか」「まだ近くににいるか」といった重要な情報をハンドラーに提供します。

3. 侵入防止のマーキング

自分の匂いで「ここは犬のテリトリー」であることをクマに知らしめることにより、「ここは危険な場所」と認識させて近づかせない。

◆ハンドラーの養成が元自衛官の再就職先の道を拓く

ベアドッグを扱うハンドラーの養成については、防衛省自衛隊地方協力本部援護課が担当する「一般社団法人自衛隊援護協会」を通じて、陸上自衛官途中退職者を中心に雇用・育成をしてまいります。

ハンドラーは犬とともに森林の奥深くまで入り、そのスピードに付いていかなければならず、相当な体力、山中での移動経験が必要です。そのため、陸上自衛隊にて「レンジャー教育」を受けた途中・定年退職者を主に採用対象といたします。

ハンドラー養成教育は北海道で行いますが、その後はベアドッグとともに出身地域に戻っていただき、自宅でベアドッグとともに生活をしながらクマ対策に従事してもらうこととなります。

この取り組みにより、地方では元自衛官の再就職先が少ないことへの強化対策にも貢献できるものと確信しております。

ベアドッグと訓練を受けた元自衛官のハンドラーをセットで全国の自治体に派遣し、昨年多く出現した人身被害を解決することが弊社の主要事業となります。

◆輸入に頼らず、日本に適したベアドッグを国内で繁殖させるシステム

カレリア犬は、2004年にアメリカのベアドッグ育成機関から輸入した後は、適正のある子犬を継続的に繁殖・育成するのが難しい状況となっております。

弊社の繁殖担当取締役である諏訪義典は、帯広畜産大学で学んだ後、獣医師の資格を取得、卒業後は牛の受精卵移植の仕事に携わったのち、北海道盲導犬協会の職員となりました。そこで白杖歩行指導員・盲導犬歩行指導員の資格を取得し、盲導犬の訓練、視覚障害者に盲導犬の貸与の業務に携わったのち、盲導犬の繁殖プログラムの構築・交配・出産・育児、盲導犬や育成中の犬たちの健康管理などの業務に30年にわたり携わってまいりました。

目の不自由な方々の足となり、さらにはその方の人生の質を高める使命を持った盲導犬に適した資質を持った犬の数は十分とは言えません。盲導犬に適性のある犬は健康面・性格面など生まれ持った割合が大きく、訓練だけでは解決できない面も多くあり、20%程度の犬しか盲導犬になれないためです。

まず凍結精子の作成方法を岐阜大学の協力のもと取り掛かり、のちに国立研究開発法人科学技術振興機構の支援で帯広畜産大学と共同研究を行い、日本で初めて内視鏡を用いた、母体を傷つけない非外科的方法で凍結精子の人工授精による子犬を得ることができました。また海外から凍結精子を輸入し、新しい血統を導入・データベースを活用した東アジア（韓国・台湾・香港）の盲導犬施設と繁殖に関するネットワークを構築することにも貢献することができました。

人工授精の取り組みによって得られた繁殖犬や盲導犬に適した子犬たちは、日本国内の盲導犬育成施設（東日本盲導犬協会・日本盲導犬協会・中部盲導犬協会・関西盲導犬協会・日本ライトハウス盲導犬訓練所・兵庫盲導犬協会・九州盲導犬協会）だけにとどまらず、台湾（2施設）・韓国（1施設）・香港（2施設）および日本介助犬協会からも要望があり、繁殖犬・子犬・繁殖に関する技術や情報の提供を行っていましたが、諏訪が北海道盲導犬協会を退職したことを受け、ベアドッグの国内凍結精子をもとに、国内初のベアドッグの繁殖に携わろうとしています。

◆直近の現況

この度、北海道恵庭市に800坪の土地と建物を確保し、「使役犬の優秀な繁殖犬の研究、および次世代の育成」に貢献するべく事業を始めました。諏訪は、安定した盲導犬の繁殖システムを研究する過程で、まさにベアドッグの本場であるフィンランドで研修を受けたため、現地との繋がりがございます。本年にはフィンランドを訪問し、ベアドッグについての見識を深め、日本への輸入（凍結精子も含めて）を計画しているところです。盲導犬で培った安定的な繁殖システムがベアドッグでも確立できれば、日本国内でベアドッグによるクマ対策を検討している市区町村へ提供することが可能となります。既に自治体の担当者からベアドッグについての問い合わせが来ていることから、多くのニーズがあるものと思われます。